

雑誌「遠鳴」の昔話

令和元年５月１９日（日）１０：００～１１：３０

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

１．はじめに

書齋に雑誌「遠鳴」に掲載された「昔話」のコピーがある。小足谷の美田秀蔵が語るのを新井が記録している。記録者の新井は平成２４年度に解説した「別子鉱山案内記」の新井琴次郎と思われる。当時は雑誌「遠鳴」の会員の新井で通じていたのであるが、１００年も経過するとフルネームで記載してくれていないと推測となる。

新井琴次郎の「紙碑・新井琴次郎遺稿」も書齋の本棚に並んでいる。偶然だろうか、必然だろうか。別子銅山に関する書籍をはじめとして、興味が及ぶ範囲で書籍、資料を収集していたら摩訶不思議なことが起こるから蔵書はやめられない。

雑誌「遠鳴」が市内に残存していないか調べる。新居浜市立別子銅山記念館には無い。別子銅山記念館に所蔵しているかどうかを問い合わせると、在った。「昔話」を含む明治４２年発行の１８号から２８号までの１年分１１冊が残っていた。それによると新井は会長で、上阪の際に総理事の鈴木馬左也に雑誌の題名の揮毫を頼んでいる。１年分の合本の際に表紙を取り除いていたので、鈴木が揮毫した題字は現存していない。「昔話」は、明治４２年１０月５日発行の２６号の掲載であった。

合田松太郎の「採鉱学大要」、理学博士・河野密の「地質学講義」、鍊槌の「地球発達の談話」と専門的な連載もあった。山中の様子がわかる掲載文を文末に収録しておく。

２月１５日発行の１９号掲載の九連坊の「別子鉱山案内記」

４月５日発行の２１号掲載の「山神祭の余興」

６月５日発行の２２号掲載の木葉の「高蕨紀行小品」、骨々子の「初夏の東平」

７月５日発行の２３号掲載の「鈴木総理事と遠鳴の表紙」

９月５日発行の２５号掲載の柳堤の「山遊びの記」、高橋生の「別子東延合宿所特色」

※雑誌「遠鳴」 住友家に奉じた退職者・現職者の傭員・準傭員の文筆を楽しむ人による遠鳴会が発行する雑誌。発行日は不規則で毎月１回発行する。事務所は東平にあるが、数名の傭員が分担しているので定まった事務所はない。会員となる希望者は電話または郵便で会員の誰かに申込連絡をすればよい。これは一山一家ならではのである。会費は月１０銭で、６ヶ月分前払い。

掲載記事は、業務上の利益となるべき記事、詩歌、俳諧、短編小説、小品文、数学問題、一口笑話、都々逸、考え物、育児法、食物料理法等。

要するに文学娯乐的または家庭の利益なる記事。ただし、事の政論、住友

家に対して不平ケ間敷事、風俗を乱す怖れの記事は没書とする。
編集・印刷は尾道市で行っていた。

昔 話

新井(琴次郎)記

語るは小足谷の開山^{み た}美田秀蔵なり。齡60前後なれども壮健剛毅、驚くべし。盛なる昔話に夜の更くるを忘る。古き事を知る人甚だ少なき今日、斯る談話^{かた}は甚だ興味あるのみならず、山の歴史上極めて珍重すべきものなれば、独り聞くは余り惜しく思ひて此の処に掲ぐ。

私は摂津に生まれ、文久2年、13歳にて当住友家に入り、翌年此の山に参りましたから足かけ47年別子に居り、小足谷の開山と言われました。此の地方は一帶に西条藩主松平左京大夫様御領地ですが、此の山に限り天領と申して、徳川氏の直轄でありました。之が松山藩主松平隠岐守様の預かりとなり居り、西条藩は直接の監督者ではありませんが、徳川家から金を送るを札と引き換へて此の山に送ることになりて居ました。徳川家の金といふは別子から毎年72万斤の銅を江戸に納め、其の代わりに米8300石と金1万両を下されました。之れ丈^{だけ}の銅は山から出なければ買い足しても納めねばならず、其の量以上の産銅は自由に売ることが出来ました。

※小足谷の開山 江戸時代は裏門と呼ばれるように下の床屋があった南までが銅山集落区域であった。裏門以南は明治になっての開発区域である。

※江戸 地名ではなく江戸幕府。銅は大阪の銅座に納めていた。

其の頃お上に出す書面には、伊予宇摩郡別子新居郡立川両銅山とし、屋号を泉屋と言ひ、主人のお名前は住友吉次郎、吉左衛門、甚次郎、甚兵衛と昔から此の四つの内だったと聞いて居ります。

其の頃東平辺は真黒に木が茂り、立川村の木切場でした。都坑方面には昔の大阪屋の吹跡にある鑊を吹きましたが、採掘はして居ません。別子は山方と東延に坑夫小屋があり、木方には焼鉋用の薪を切り出す木方人夫が居り、見花谷、両見谷には吹方人夫即ち溶鉋夫が居りました。歓喜、歓東口には坑内事務所あり。鉋石は主に之から出て少し離れて天満、大切坑にて鉋石を出したけれども、事務所はなく時々鉋の溜ったを買い取りに行きました。製錬所は今の病院側の川辺に鉋石を溶かす一番吹の炉が並び、向側には鉋を溶かす二番吹の炉がありました。

※製錬所 裏門上流の下の床屋。

今の病院側だから左岸に一番吹炉があり、右岸に二番吹炉が配置されていた。
明和6年(1769)の別子立川両銅山図でも、左岸が鉋吹炉、右岸が真吹炉。

此の付近の禿山は今の有様とあまり変わりません。溶鉱炉(地名)の辺から下は草も少なくなり、今学校と土木事務所のある所はタシッポ(虎杖)と萱がしげり、昔からの墓場でした。小足谷の銀切口から下は大木の切株が今も残るとおり。杉檜の林は森々と何処まで続き、今の七番の奥に似て猪や鹿や時々狼等も出て物寥しく、夕刻よりは通行の人も絶えました。とはいえ家は少々ありましたけれども、昔は獣を食ひませんから人が殺したりはしません。兎などは度々庭先に跳ねて来ました。狼が来たとても家を閉じて小さくなって居たこともありました。

※昔の墓場 現在学校跡、劇場跡と呼んでいるところに該当する。

※小足谷の銀切口＝小足谷疎水坑

※猪や鹿 今も猪の足跡や堀跡を見る。鹿も縁起の端で2回目撃した。

銀切口は私が此の山に参りました頃、50間ほど出来たまま中止してありました。着手したのはそれよりも2、30年前だと言ひます。御承知のとおり坑内の水を竹筒のポンプで引き上ぐるのですから、人と金ばかりかかりて仕事は埒明かず。其の為に此处から疎水道を掘りて水を抜く積りでした。昔でもやはり鉱毒問題はありましたと見え、阿波徳島の藩主蜂須賀家から其の川へ坑内の水を流し込まれては伊予川となり吉野川に入りて国産の藍に害があると、故障を申し込まれ中絶したのだと言ひます。

※小足谷疎水坑着手 寛政4年(1792)。

文化元年(1804)に93間掘ったところで中断を余儀なくされた。美田が別子銅山に来たのは文化2年(1805)、開削から13年後。伝聞なので年数が大幅にずれている。

其の後幕府から落合豊後といふ役人、川筋を検分して害無きを確かめて帰り、幕府から蜂須賀に向て害もないのに徒にさわいで鉱山の業を妨ぐるは不届きなりと叱られて、害は藍ではない鮎だ。鮎が死んで困るので御座ると言ひ抜けたとは滑稽ですが、鮎くらいは死んでもよいと言はれ、申訳の為に重役二人切腹して済んだと申します。切腹とは大層ですが、人の命の安い時代ではあります。又幕府から睨まれては忽ち知行の1、2万石には響く訳ですから1、2人の命には代えられますまい。之で苦情も落着して、銀切が再び着手になったのです。

慶応元年ですか、2年ですか、左様伏見鳥羽の合戦の2年前頃です。坑夫に安い米を食わせることが出来なくなりました。それまでは米1斗が6匁でした。6匁と言ふても分かりますまいが、之は金と銀と銅と貨幣の本位が色々ありました時代のことで、時と場所で銭の相場の上り下りがあり不便でした。此の時は別子は金1両は銀133匁3分に当たりましたから、1両を今日の1円とすれば、6匁は7銭5厘に当たります。1斗が7銭5厘です。

※買請米の安米が無くなったのは慶応2年。戊辰戦争の2年前。

※米1斗→7銭5厘 現在なら約4000円

当時の1円は現在の53, 333円

とはいえ昔の1両は今の1円ではなく、10円以上にも当たりました。折から幕府の土台が壊れ出し、銅どころの騒ぎはなく米も金も送れぬとなり、非常に此の山は困難な位置になり、今の如く地所は持たず米の来る場所はなく、別子は立つか潰れるかの境にのぞみ、支配人広瀬幸平氏断然改革を為し、1斗を45銭に引き上げました。そこで労働者は不平を起し、製錬夫はぞろぞろと下山し、国道の中村まで行くと、村民が梯子を倒して道に横たへました。梯子ですから跨いで通るには訳は無いのですが、古来の風習で横たえた梯子をまたいで通るは作法に無いといえます。乱暴な人足の内にも優しい心掛者も居りまして、此の処に喰らい止められ真光寺に入りて休息するところを西条の役人に仲裁せられて引き返しました。一方坑夫も不穏となり、山神社に集まり之から勘場に押し掛けんとするとき番所で押さえられました。先程言ひ落とししましたが、番所とはお上の役人にて、上番所下番所各3軒づつあり、上番所は日々出来る銅を掛けるに立ち合ひ、下番所は帳面を付けるに立ち合いたるのです。上下の番所より役人一人宛出て、1日勤むれば翌日は別の人々が勤め3日目又前の人達が出るのです。

※横たえた梯子をまたがない

①梯子は高い所へ上るのに使う道具で、梯子をまたぐ姿は梯子から転落している姿となるので、縁起が悪いのでまたいで通らない風習になったのではないかと。講座当日に、「梯子をまたがない」と別子山に住んでいた百歳の祖母から聞いていた人がいた。大生院にもこの風習を知っていた人がいた。

②「梯子は神が登り降りする神聖な用具で、昇降する聖地には邪眼を置き、聖地の下には犬や豚のいけにえを埋めて土主を祀って悪霊の侵入を防いだ。また道は峠路や海上と同様に恐るべきものであった。道に呪詛が加えられると、人は必ず災いを受けると考えられていた。そのため道には、災いを防ぐ種々の呪禁を加えていく必要があった。」との古代中国での考えが、漢字の伝来とともに言霊として入って来て伝わったものではないか。聖なる梯子を置かれたので、聖を汚せなくなって越えられない。また梯子を置かれて呪詛が加わえられたと考えて、越えられなくなった。

長州征伐の頃は、松山藩はやはり幕府の命を奉じて出征し、途中で引き返しました。其の後間もなく御維新の騒動で、賊と官軍が地位を異にし、薩長土の連中は松山を押し込めて15万石を取り上げようとして長の毛利と土の山内両藩の立ち合いで潰しに出かけました。慶応3年正月28日午の刻（12時）に両藩松山に出会うと約束しましたが、土州の深尾丹波考ふるに長州は先年の恨みを晴さんがため約束よりも先に行き、滅茶滅茶にやり付ける

だろう。之はさせてはならぬとて急行して前夜に入り込み居ると案の定長州連は夜明けに乗り込んで来たが、土州に先んじられて今更乱暴もできず、之が為に松山は助かったと申します。

之から別子は土佐少将の御預かりとなり、後は高知藩の御預かりとなりました。長く日本銀行総裁をせられた川田小一郎さんは、当時元右衛門と言ひ土佐元山の郷士だそうです。明治の初め頃、別子、新居浜に詰め居り、宰平さんと入魂の間柄で万事便宜を得たと申します。後、丸亀藩の御預かりとなり半年程たちますと明治2年か、3年でしたらう。政府の直轄となり6等以上の人は両刀を帯び大意張りで歩きました。鉾山の高張提灯には菊の御紋を付けたこともあるようです。政府と皇室の区別があまり明らかでない時代ですからなあ。

昔は、酒は西条の田村と塩屋の2軒から荷車で立川に持て来て、それを人の背で山に上げたものですから運賃の高いことは勿論として、ひどい奴は途中の休み場で樽に穴を開けて飲み、跡に水を入れたり、釘を打ちたりして始末に行きません。そこで慶応の1、2年、山に醸造所を作り好結果を得ましたが、2年程立つと幕府の末で米が来ませぬから中止となり、明治になりて再びはじめ4年間作りました。場所は今の処です。酒はよくできましたが、一向儲かりません。之は不思議だと老分広瀬翁が調べに来て、今の日野の合宿所(第一合宿所)の家を建て、之に詰めて夏中居り目を光らせました。老分とは総理事の意です。酒を買うには5升、1斗、1斗5升、2斗の4通りとなり、伊予屋小泉藤七と角屋村上栄七の2店に金を納めて切符もらひ、之を酒蔵にて酒に引きかえる方法にて、なかなか厳重でしたが、肝腎の本元で樽から洩りて人の懐に這鑄るやら、色々の魂胆あらわれて、支配人と元締、其の他が大層叱られました。元締とは副支配人にて2人あり。坑内の分かる人と事務担当と分かれて居りました。^{ついで}序に言えば、其の下が役頭と言ひて今日の主任です。さて其の事件で酒の方は支配人の管轄から離れ家長さまから直に私に委任せられまして、人の引退も金銭の出入も一切他人の命令を受けぬこととなり、私は大層責任の重いのに恐縮し、一生懸命にやりました。之が明治6年です。7年には人間の取り締まりと帳簿の整理は遺憾なく行きましたが、素人の悲しさ酒の造り方は知らず、此のとおりの下戸で味をみても分からず、親分任せにした為に大失敗して、清酒400石の内380石は腐りました。改革の不平で酒造りに悪戯をされたのと言ふ人もありましたが、それも証拠はなし。其の責任を帯びて退身を覚悟しましたが、宰平老分も事情を察してくれますし、然し他に対して其の儘^{しか}にはならず、私は降等の処分を受けて引き続いて従事することとなり、益々奮励して、御主人の損失を取り返しました。明治11年に家法が出来、支配人に監督せらるる事となり私の責任もやや軽くなりました。

※酒造所 明治3年(1870)に設置し伊丹から杜氏を雇い着手するがいい酒が出来ず、明治6年(1873)の暮れに岡山県南の浦から杜氏を雇って酒らしきものが出来る。

※家法が出来たのは明治15年(1882)。

明治16年に小足谷に私は家を建てました。其の前年の15年に溶鉱炉(地名)に製錬所を移し煙が来て此の辺(小足谷)の木が枯れ始めましたが、まだ私の家の前の崖には檜も多く石楠花ツツジの花も多く美しいものでした。此の時私は永年醸造に尽力して利益を挙げたるを誉められ目録を添えて長文の賞状を戴きました。此のとおり前の家長様の御判もあり、家の宝で御座います。明治19年に辞職し、其の後都合ありて25年に再勤し、32年の春に止めましたが、其の秋の大水害で又々出勤を命じられました。老年と商売の忙しきと故で御断り申し、唯手伝いに上りまして、36年に全く止めました。当家の御厄介になる前後つうじて39年間で御座います。

鉱業の方は余り精しくは有りません。山で粗銅にして大阪吹屋に送りたるを明治の初頃立川に支店を立て、精銅から丁銅までを作りました。今の黒石の停車場から3、4丁下に向ふを見れば草原の荒れ地が其の跡です。

明治32年の水害であのとおりになりました。いいえ山根の煙突は違います。あれは岩佐巖と言ふ人が10年ほど湿式法の製錬を試みたので。

盛山(岩石の火薬爆破)は、明治元年頃伝はりました。其の頃立川分店の側に畳3枚程の岩があり、夏は6、7人之の上にて涼めるのですが、5両くれば之を砕いて見せるとて、初めて発破を掛け人々を仰天させました。

明治5、6年フランス人のルイ・ラロック来り、東延斜坑の設計をしました。月俸800両に賄料100両です。然し其の内30両宛出して塩野門之助、益田芳造と言ふ2人の通弁を雇ひ置きました。2人共見慣れ、聞慣れて後には仕事に分り、フランス人の帰れる後、当家に雇われ洋行しました。益田氏は中途に病氣をして帰り、今死にました。塩野氏は6、7年後に帰り、4、5年勤めて、洋行して帰って辞職し足尾に行き、又当家に帰りたるは人々の知るとおりです。

※ルイ・ラロックの雇用は、明治7年～8年の1年10ヶ月間。

※ルイ・ラロックの月俸・賄料は900両

ルイ・ラロックの雇用予算が900円から通訳費用を出しているので、月給としては600円支払ったと考える。

年俸7,200円は米換算で $53,333円 \times 600円 = 31,999,800円$

(高橋利光の明治期の数値試算では、3億5586万円)

(米価が1斗5000円時なら $66,666円 \times 600円 = 39,999,600円$)

明治26年頃、上部鉄道が出来ました。私が25年に再勤した時は、まだ出来ず下等の鉱石を山根分店に送るには人力で引っ張りました。

立川は昔は角野とは別の村で、両村の間に東平^{くじ}辺の山の所有を争ひ、公事となり松山の裁判から広島に移り、大阪から東京まで持ち出し、何千円も掛け大いに借金をこしらへ、遂に当家に東平を買ってもらいました。

まあ話はこんなものです。また考え付き次第折々御話し申しませう。(終)

(読みやすいように句・読点を施し、一部は現代送り仮名に直している。)

新井琴次郎略歴

明治 6年 3月19日 群馬県多野郡万場町大字生利字飯嶋に生まれる。(現在の神流町万場)

明治30年 8月 第一高等学校卒業

明治33年 7月 東京帝国大学工科大学採鉱冶金科卒業

明治33年 7月 農商務省任官
盛岡鉱山監督署勤務

明治34年 4月 仙台鉱山監督署勤務

明治34年 9月 第二高等学校地質鉱物学講師兼任

明治36年12月 大阪鉱山保安監督署勤務

明治38年 2月 農商務省依願退職

明治38年 3月 大阪住友家入社
忠隈炭鉱勤務

明治40年 1月 別子鉱山勤務採鉱主任(課長)

明治43年 2月 海外工業視察で欧米へ派遣

明治44年 1月 帰国現職に復帰

大正 2年 8月 住友総本店勤務

大正 4年 4月 調査で中国へ出張

大正 8年 3月 調査で満州に出張

大正10年 6月 住友家依願退職

大正10年 7月 京都大帝国大学大学院で鉱床学研究

大正11年11月 福岡市に移転 福岡・佐賀の炭田研究・事業開発
その後福岡夜間中学校長

昭和40年 2月21日 没

2. おわりに

新井琴次郎の「未定稿・別子鉱山案内記」を読んだときは、雑誌「遠鳴」と出てきてもどんな雑誌か皆目見当がつかなかったが、今回でようやく概要が判明した。

美田芳蔵の語りの内容も、現在は多くの出版物に書かれているので大方は分かっていたが、それでも個々には興味を引くところがあった。

＊下の床屋の一番吹炉と二番吹炉の配置

＊学校と土木事務所のところは墓地であった。

＊阿波の鉱毒問題の滑稽秘話

＊梯子倒しの風習

- *お上の上番所、下番所の役人の仕事内容
- *維新の長州と土州の松山への先陣争い
- *酒は西条の田村と塩屋の2軒から運ばれていた
- *慶応年間に酒が造られていた
- *酒の買う方法
- *塩野門之助と益田芳蔵の通訳の初めころの様子
- *立川村と角野村の裁判

別子鉱山案内記

九連坊

8 番坑道

一番坑道から段々に此の坑道に下れば東平と殆ど均しき高さ、即ち海面上2470尺に達したのである。南口1160尺程下になる。東延斜坑は東延から鉱床の下盤に沿って此の坑道まで一直線に下って居り、其の傾斜49度、長さ1784尺である。8番坑道は東7号の中央で鉱石尖滅(次第に細くなりて消滅)したれども、坑道10号まで延びて居り、目下鑿岩機を以って猶掘進中である。之は鉱石を探るためで2年の後は、日浦谷(小足谷の下方10丁)から掘り込むのと貫通するから電車で東平から日浦に出でられ、僕等山住の人々には大に便利になる。

さて8番坑道は、西には7号まで進み猶掘進中である。之も鑿岩機を用いる。此の方面の鑿岩機は上部坑道に用いるものと少しく別で、ライナー式、又は水のライナー式と云ふもので、タガネの先から水が出て石の粉を洗ひ出す仕掛けとなる。東の鉱石の端から此处まで約3750尺の長さがあるけれども、まだまだ鉱石がある。何といふても日本一の大鉱脈である。

4番坑道以下の鉱石は自働機又は鉱石落としによりて此处に集まる。捲揚機械は東4号にあり、原動力には東延のものと異なり、圧搾空気を用いる。38馬力を出す。之は久しからずして廃止し、東2号に据え付け中の電気捲揚機を用いる積りである。

運転場の附近には空気圧搾機がある。ライナー式で1インチ平方90ポンドの圧力に空気を圧縮する。此の空気は空気溜に貯へられ鉄管に導かれて捲揚機と鑿岩機とを動かすに用らる。圧搾機は電気で動かす。

西4号と第三隧道と連絡する処を抜き合いといふ。此处に120馬力のライナー式空気圧搾機2台あるが、今は都合ありて使わぬ。原動力は電気である。

9 番及び10 番坑道

9番坑道は8番坑道の下200尺にあり、東1号から東7号まで延びて居る。勿論まだ掘進中である。10番坑道は其の下に昨年末に掘り始めた。是等坑道を見れば別子の下部の有様が分かる。鉱石の幅は広いところで15尺以上あり(イヤ)(メゴマ)の如き硫化物は漸々少なりて硫酸製造などには不適當となるが(カワ)は漸々厚くなり、且つ其の内に第二次に

浸入した富鉱なる上鉈(ソバカハ)(ヨモギ)等は益増加して平均品位に於いては上部坑道に優るとも劣らぬ。実に金屏風を立て廻した様だから有難い。住友家万々歳である。此の大鉈脈を持って居れば不景気が百年続き、日本中の鉈山が潰れても別子だけは残るとは、鉈業者一般の世論である。但し閑な人間が余り多く居ると損をするから、お互いに欠伸の共進会などは開かぬ様に心掛けねばならぬ。

9番坑道には唧筒^{かこつつ}がある水を8番に上ぐるに、シンキングポンプ1台を電気で動かすと云うと大仕掛けの様だが、其の実たった5馬力、夫れも1日僅か5時間運転すればよい。忠限の会員諸君から見たら於手遊び^おと思ふだろう。

第三隧道

8番坑道運転場から東平に向へるトンネルを云うふ。之の岩は岩石中を掘ったので鉈石はない。明治27年1月起工し、坑内外より同時に始め、78ヶ月を費やして出来上った。長さ6000尺、幅11尺、高さ10尺。之に24ポンドレールを複線に敷き電車を往復せしむる。電車とは機関車を電気で運転せしむるので、其の電機はトロリー線といふて、蜘蛛の網の如くレールの直上に引っ張られたる裸銅線(ゴムや木綿で巻かぬ)から流れ来たり。ポール即ち棹を伝はりて機関車中の電動機を廻し、車輪からレールを伝わり元の発電機に帰る。電車は重さ3噸、16馬力あり。1台にて鉈車7つから9つまでを引き、1時間^{まいる}の速度を出す。電車は坑口から選鉈所まで2400尺程あるから総計8400尺を往復するのに約1時間かかる。鉈石は此の方面に出るのが日に10万貫で、坑夫の出入りにも、材木其の他の運搬にも用いるから平常45台を昼夜運転する。電気は新居浜から来るのは1万ボルトだが、東平で550ボルトに下げる。若し電車が5台同時に動けば、180アンペールの電流を要するが、普通は70~80アンペールである。

と云ふたのでは素人に甚だ不親切で素人には分かるまいが、どうも電気は目に見へない奴だから、此の位の強さだと手似真で説明する訳にもいかぬは困ったものだ。ざっと云って見れば、電気とは一種の力で、引力、圧力、磁力等に似たものと思へばよい。之が流動する(と云ふては専門家には論もあらうが此処は素人向きです)ときは電流といふ勢力となり色々の作用を起こす。車も廻す、熱も起こす、光も出すこと^{あたか}も水流に均しき勢力である。水流なら流るる強さと1分間水量とによりて勢力に大小があるが、電気も流るる強さと量とによりて勢力に強弱があるから、此れ2つを云はねば勢力の大小が分からぬ。電気の強さは電圧と云ひ、之を計る単位をボルトと云ふ。電気の流るるを電流といひ、之を計る単位をアンペールといふ。ボルト数とアンペール数を乗ずればワット数となり、「動き」を示すことは前に本誌「馬力の話」にある。

序に云ふ、何故に電流を東平まで1万ボルトの高压にして送り来るかと云うふに、強い電気は少量でも大なる働きをするから1万ボルトにすれば少量送ればよい。少量を送るには銅線が細くて間に合ふ。電気工事には銅線に金がかかることは非常だから少しでも銅線を経済にする為に、高压電気を送り来るものである。こんな強い電気は危険で其の儘^{まま}機関車には使へぬから、550ボルトに下げて電車に使ふのであるけれども、まだ中々危険で触る

れば死ぬから用心するがよい。浜から送って来る電気は腕木を赤く塗り柱に危険と書いてある。

※第三隧道6000尺(6000 尺×3.3m=19800m) → 第三通洞は1795m

第三

とは第三隧道の略称だが、今は此の附近の地名となる。坑口に採鉱課出張所があり、坑夫の出入りを監督する。上には舎宅あり、遥かに上は上部鉄道の一本松停車場にて、其の下に稼人小屋が多い。若し角石原から坑外を此処に下れば、途中に柳谷の沈殿所や稼人の部落がある。

沈殿

坑内水は8番坑道に集まり第三隧道から出る。ただし2番坑道以上の分は寛永疎水道に流出するを樋で此処に導き合併する。此れ等は合わせて平均1分間40立方尺程あり、銅分は1万分の2程含む。之を^{おびただ}夥しき沈殿箱に導き銅分を沈殿せしむる。其の方法は別子にて説明したものに同しいから略す。其の余水はまだ銅分が残るから、木樋にて道路沿いて山根駅に導き、再び沈殿せしむる。

選鉱所

東平の中央にあり、電車で運び来る鉱石は鉱石溜に落とし、此処で捨て石を分ち乍らショベルで鉱車にショベリ込む。次に鉄棒の斜格子の上に投げらると、2寸以下の小塊と紛とは、之をもぐりて下に落ち、大塊のみ砕岩機に入り、2寸以下に噛み砕かれる。砕岩機は電動機で動かし、^{あたたか}恰も人間の口で豆を噛む如き運動をなし、鋼鉄の歯で噛むのである。鉱石は次に鉄板の篩に入り7分以下は紛鉱となり以上は塊鉱となりて分かれ、別々に運鉱帯に運ばれて鉱石溜に入る。此の選鉱所に男女合わせて50人程居り、電力100余馬力を用い捨石1割を除き、精鉱約10万貫を出す。此の内7割余が塊鉱で、2割余が粉鉱である。

此の家は随分金をかけて建築したが、一昨年の暴動で焼失し、今は仮工事の^{まま}儘である。

東平

ナルとは傾斜緩なる意味とかいふ。あまり緩ではないが此処に舎宅が沢山ある。雇員多く居り新開地で人に活気があり、面白い相談も成り立ち易く、此の雑誌なども始めは此処の人達で発起して今日の盛運を見た。始めは^{きつと}屹度損するが、其の節は損を各自の分担するといふ決心でやり出した。古い場処は上に立つ人が活気を付けるに、注意せぬと沈香もたかず屁もひらぬ的若陰居をこしらへる。

隠居様方は時々此の雑誌でも読んで別子をひと廻りして見たまへ。謡や玉突きの愚かな遊戯よりも身体の為によい。^き扱て東平の背後を呉木といひ西方を喜造谷といひ両方に稼人小屋が多い。東平舎宅の間には梅、桜、桃を植え、向かう山には石楠花、つつがが咲き、一の森公園に上れば向こうは須領岳峭立し、下は国領川迂曲し、遥かに波静かな瀬戸内海を望む。別子殺風景に比して稍心を慰むところがある。別子より1000尺程低いから雪幾分

少ないが、内海の湿風来るりて、しばしば濃霧となり座敷に黴が生へる不健康地である。

※西方を喜造谷 東平地区は第三通洞口前から開け、採鉱課出張所から見ると喜造谷は西方となる。現在は「喜三谷」と表記する。

ペルトン水車

第三から木樋にて柳谷の水を東平向こうに導き、径6^{いんち}吋、長1000尺の鉄管で斜めに落とし来る。落差360尺。落差とは高低の差で水の圧力は鉄管の太さや長さに関せずして、深さのみによるから落差をいへば下から飛び出す水の力が知れる。之に水量を乗じて馬力が知れる。此の勢力で水車を廻す。普通の水車は平板を水が押して廻す。ペルトン水車は車輪の周囲に附着せる多数の杓子に水が突き当たり廻すのである。馬力75。

此の水車で空気圧搾機を運転せしむる。此の機械はシユラム式1台にて、空気は50ポンドに圧縮せられて鉄管にて坑内に送られ鑿岩機を運転せしむる。

大索道

ブライヘルト会社の新式で便利である。東平より黒石に鉱石を送るに用いらる。ただし1線で此の距離を引っ張るのではなく、途中に新道、端出場上、蜂ヶ岳の3ヶ所にステーションがあり全、全長3720メートル(約1里)。高さの差573メートル。柱間距離の最大なる処は578メートル。谷を越しえて、落シの鉄橋上数100尺の半空を渡りて壮観でる。柱は鉄梁より組み立て、之に石ヶ山丈の複索道同様に2種の索を掛く。運転法も大抵彼に似て居る。レールとなると索は直径38ミリ及び30ミリの2本である。鉱石を下す方の索が太い。しかし此の索道は両方共ロツケドコイルと名づけられ角のある鋼線を組み合わせ、一寸見れば1本の鉄棒と見ゆる丈夫な索である。鍋を運ぶ索は太さ22ミリ、之に鉄鍋が72メートル毎に1個付く。其の重さ150キロ、鉱石600キロ(約160貫)を入れて、1時間に2.5メートルの速度にて運転するから約30分間に1個通る割合である。

しかも此の索道も自動、即ち荷物の重さで動くので外から動力を供給せぬ。却ってあまり早く廻り過ぎる恐れがあるから上の方で、羽のある車で油を^{はかり}掬廻わさせて之を防ぐ装置がある。

※東黒索道は3575m

落シ発電所

奇岩突兀^{とつこつ}山脚迫り来りて、奔湍^{ほんたん}雪を撒き景色がよい。東平から此処の間は絶景だ。谷を渡りて150尺の鉄橋が架かる。一方にペルトン水車と発電機とある。水源は鴨淵にて、落差240尺、150馬力、電力は100キロワットである。キロワットとは1000ワットと云ふことだから、100キロワットとは10万ワットで、馬力に直せば134馬力となる。

端出場発電所

直径5 呎^{ふいと} 24 吋^{いんち}、長24 呎のコルニシ汽缶2 個あり、80 ポンドの圧力の蒸気を作り160 馬力の蒸気機関ありて発電機を廻す。電流は3300 ボルトにて100 キロワット即ち134 馬力の電力を出す。

序^{ついで}に日ふ。新居浜には第一発電所に180 キロのもの2 台、即ち400 馬力を出し、第二発電所100 キロ、即ち134 馬力を出す。何れも3300 ボルトの電圧なれど1 万ボルトの高圧に高めて落シ及び端出場の発電所から来るものと同じく、別子及び東平方面に送らる。電気の使用所は新居浜で少し許、あとは皆採鉱課である。

黒石及び新居浜

鉱石は東平より黒石に送られ索道の鍋から鉱石溜に落とし、下の口から鉄道の貨車に積み込む。之は新居浜にて被曳船に寄せ四阪丸の汽船にて四阪島製錬所に送らる。被曳船は木造25 頓積み及び30 頓積みの2 種あり。之が1 回に13 隻一列になりて曳かれ行き、1 日3 回航海する。四阪島は新居浜の北9 哩^{まいる}の海上に当たるから、冬分は時々海荒れて困る。随分厄介ですが、明治37 年、此処に移ったのは新居浜附近で農民が煙害をやかましく唱へた為であつたが、移って見れば矢張り煙害は起こり、昨年などは大に閉口した。

新居浜には発電所と機械工場があるが、此の記事は別子が主だから略す。

案内は之で終わった。以後別子にお登りる人は此の案内記をお読みてお置きたまへ。

※入力が終わって、別子郷土誌の付録・未定稿「別子鉱山案内記」が頭をよぎる。同名の別人が記した別子銅山の参考資料だと「遠鳴の別子案内記」を入力したが、項目と言い、記述と言い似ている。平成24年度のレジュメを読むと同じであった。九連坊は新井琴次郎であった。雑誌「遠鳴」に連載した後に、別子郷土誌の原稿として加筆していた。項目が加わり、浜から山への流れで整理したことが分かる。

山神祭余興

住友鉱業所に於いては、例に依って来る5月1、2、3の3日間に山神祭を執行せらるる筈^{はず}なるが、今其の余興としての計画を聞くに、別子東平四坂島及び西之川は何れも芝居興行のあることは、例年に変わりなきも新居浜に於いては惣開西条間往復21 哩^{まいる}18 鎖^{ちえん}のマラソン競走をなすことに定め、選手は何れも労働者より20 名選抜し、10 組に分つて競走せしめ、第一着者に金30 円、以下夫々賞金を贈与するの計画なり。

※21. 18マイル＝約34km。中萩経由の加茂川か西条町役場折り返しか。

高蕨紀行小品

木葉

朝雲

春に無趣味の禿山を発足して、山路の奥深く高蕨の春を探らばやと。古りし洋傘を片手に、先ず七番車道に歩みを進めつつ、行く手の連山を見渡せば、霞にあらぬ春の朝雲頂に白き一抹の雲を漲らせ、春姫が裳の薄衣に包まれたる如き遠山の景。ああ我も今日一日を自然の懷に抱かるる寵児の旅かと独り微笑まれつつ、草鞋の足も最と軽けれど、内心聊か平模様の氣遣はれつつ。

谷の鶯

下七番の緑葉影深き谷間の道に、我が耳を驚かせしは鶯の声なり。俗耳俗腸を洗うて、清く高き爾の歌蘇りたる我は、直に現世の煩累を去って、歓楽極りなき時の天国に逍遙するに似たる。一小詩人となり済して、爾と俱に短かき春の栄光を歌はむかな。

馬子歌

春山無伴独相求、伐木丁丁山更幽と杜甫の詠じたる詩句を想ひ浮かびつつ、転た春色幽邃なる山靈に感じて、賛美の詞を捧げむものと。朗らかに漢詩を吟ずれば、山腹の木立に反響して怪しき妙音我我を驚かす。静かに耳を澄ませば、眼下の谷の水音幽かに響を伝ふる時、しかも行く手の山影より、声も長閑な馬子歌を高らかに歌ひながら、現れたるは年若き一人の馬子。長き手綱に重き高荷の痩せ馬を曳きつつ、悠々と此方に歩み来れり。無言に行き過ぎたる余は、かの馬子歌の余韻遼々として遠ざかりゆく声に聞き惚れつつ、不覺脚下の棧道の破れに躓けり。

大蕨の花盛

小麦畝にて少し早き昼飯の膳に向へば、伊予土佐の分界分嶺を正面に眺め、初蕨の珍味に舌鼓を打って立出て、晴れやらぬ雲天を打ち仰ぎて、長き山腹の馬道を幾曲がり、弓の山の在所に古き山家の昔を偲びて、森々たる坂路を降り、押越の谷に草家の門の緋桃白桃の雅致を賞し。今や高蕨に近き一在所大蕨の里に出たり。山腹の一路を廻り先ず驚きしは、老樹の桜なり。幹半ば朽ちて空洞を現はしたれども周囲二抱許りもありぬべく。丈余の枝は八方に勢よく高く蔓りて、咲き誇りたる満開の花の麗はしさは、げに清艶と謂はむか。崇高と称へむか。暫くは只恍惚として其の美に酔ひ、佇立久うして漸く歩をうつせば、流れに添ひたる絶壁の上なる畑中に、点々紅き緋桃と白き梨の花の競ひ咲きたる。軒傾きし伏家の庭に真紅の花を仰ぎ見つつ、夢の如き仙境に足の運びも最と遅かりけり。

少女と花

花の盛りの大蕨を過ぎて、清き流れの川向かひなる対山に眼をうつせば、緑樹の中の紅躑躅美事にして、古代の民屋の俤を偲ぶべき人家4、5軒。山を負ひて建ちたるを見れば、亦一種の感想なき能はず。俯して断崖に聳ゆる木の間より千仞の谷を見おろせば、幾百の溪流をあつめて緩く流るる春水青く。清浄なる白砂と黒き奇岩の対照こそ面白けれ。突然頓狂なる洞間声を張り揚げて、自作の狂歌を高らかに放歌してつと山影を廻れば、こはいかに2

人の少女あり。嬌羞^{きょうしゅう}を帯びたる態度に、今しも小休の興を破られたりと覺^{おぼ}しく。立ててにせる桜の枝に美しき瞳をす江たる愛らしさ。無骨の我も聊^{いささ}か辟易の姿にて。先に我口より出でたる覺興声を恥ぢたるこそ可笑しけれ。

花の露

朝雲に氣遣はれし空に変なく。無事の行路を終へて午後 3 時高蕨に着き。先ず山林事務所に到り。課員に面謁^{めんえつ}して会談数刻。茲^{ここ}に一場の悲劇物語とも云うべき実話を聴かされぬ。曾^そは一昨日の出来事にて、弓の山に住む林業請負人の息子、小林区署に請負金を請け取り、それを懷にし帰途当地に小店に立ち寄りて酒を呑み、酔歩^{いささ}躑々として大蕨の手前なる苗圃の処に到り。嶮巖^{けんげん}に足踏み外して谷底に墜落し遂に一命を果てけるが。当日は誰一人之を不知。恁^{これ}が実家には翌日に至るも息子の帰らざるに喫驚し、人を馳せて八方搜索したるに、初めて川岸に横たはる恁^{これ}の死体を發覺せりと。しかも其の齡尚 22 歳の血氣盛りにして、資性温厚にして、平素余り酒を嗜^{たしな}まず。将来有望の一青年なりしと。物語は之れりに終われりと雖も。恁^{これ}が悲慘の最後には、人生の深き神秘を宿して、多感の詩人を哭^なかしむべく。余も亦暮れゆく春の流水に無量の感慨を深めけり。

帰路

春の一夜を旅寐^{たびね}の夢に明かしつつ。早起窓を排して、新緑の山を望めば、昨日にかはりて天色払ふが如き快晴に。心気自ずから爽然として宿を立出て、事務所に到り課員の出勤を待つ間に、川に臨める縁側より満山を見上げて、偉大なる自然に対し黙想すれば、心は遠く俗塵を離れて高き神靈に同化せられ、忙然とたる。折しも背後聞こゆる軽き上履の音に驚かされて、初めて我にかへれば、身は早やこの美しき仙境を辞して、謝詞を述べて課員に袂別し、陽春の名残り尽きせぬ山河を後にす。ああ我が家を出て僅^{わず}かに往復 2 日の旅路に、無心の山水我が心を養ひ。清き春水に筆硯を洗ひて、永く春光の記念をとどめむかな。

※美文での春のスケッチであった。

初夏の東平

骨々子

百花梢を辞して満山の新緑は翠色滴らんとし、清新の気天地を襲ふて、杜鵑声裡薔薇花の笑ふなど無限の雅趣愛すべきものあり。雪に雨に將^また風に鬱積せる頭脳をして始めて爽と称へ快と呼ばしむるものは、今日此の頃に於ける東平初夏の風景なりとす。殊に 5 月 16 日より開始セル東平倶楽部は、久しく娯楽機関に渴したる東平傭員の満足限りなく。毎日入場者 10 名。最も盛なるは玉突にして、既に同月 30 日競技会の催しさへありて猫も杓子も球を突きかざるものは東平傭員間の交際場裡に顔出しの出来ぬ有様にて。其の他囲碁室書籍室等大入場所御座なく候の大景氣。夫れかあらぬか傭員の全体が何となく活氣あるものの如くなるは。

鈴木総理事と遠鳴の表紙

本誌の表紙に印刷せる「遠鳴」の2文字は、本誌初号発刊の際、急速印刷業者に任せて調整したるものにして、爾来名家の揮毫を以って表紙を飾り度しとは会員多数の希望せしが。今回、新井会長上阪の序を以って鈴木総理事に揮毫方を依頼したるに、直ちにに快諾せられたる由に付き。不日到着すべければ、来る9月号より本誌の表紙に一新面目を施すべく、且つ総理事には今回本会に入会を申し込まれたれば、本会の面目此の上なし。茲に於いてか編輯幹部の責任に一段の重きを加へたと共に会員たるもの又筆を謹んで遠鳴公園の格式を損せず、益々本誌をして有益に活用せられんこと切望に堪へざるなり。

山遊びの記

柳 堤

9月と云ふ月には如何に雨の多かりけり。吾が東平の如きは雨降ると同時に濃霧の襲来殊に烈し。是れ東平在住者の最も嫌忌すべき厄介物なるも、地勢の関係上如何ともし難しと言ふべき也。雨と霧とに厭ける吾々は10月の月に入りて、始めて輝々耀々たる日光に浴被することと為れり。敢て心神の爽快を感ずる。而已にあらずして宿の山神以下郎族の歡喜絶頂に達せり。

たとえば湿気満々たる衣類の乾燥、襦袢の濯ひ、家屋内外の掃除と何から何までお日様の御陰を蒙らぬものは非ざる也。諺に兵隊さんや巡査さんに苦痛を与ふるには、長雨より右に出づるもの無しと、或いは然らん乎。吾が鉦業所に従事する外部の勤務者傭員と労働者を問わず、雨の為めには幾干の苦痛なきを得んや。本年は比較的雨歳なりとは、一般の唱へつつある所にて、吾人も亦而か思へり。雨歇みぬ霧霽れり快哉を叫ぶ者、恰も戦勝を祝するが如し。忍耐に忍堪を重ねし鬱気を銷散すとの日は10月6日と定めけり。

※襦袢 おしめ

予は例に依りて早起きを為し、毎日の課程たる室内の塵拾いひ、内外の掃除、水汲み等の役目を済まし、朝食を喫し、草鞋脚絆の軽装にて草庵を出発せり。時辰計は正に午前9時を指せり。洋杖を振りつつ東平の坂を登り詰めけり。呉木上部の新開鑿の地形場に着きたり。数多なる土方連の一群は蟻の如く往来しつつ山岳を壊し、其の土塊を運搬セルを観る。昨は巍然たる峰岳、今は解体せる平地とは如何にも金力の自在なるを表白するに足れり。案ずるに此の工事は学校校舍増設の必要に起こり、而して之が序に労働者貸家敷地を拓めるにありと。噫東平の一物一草は莫大なる金也。主家鉅資を吝まず傭員及び労働者子弟の為め模範的学校を設置せらるること深く感奮する所無かるべからずと信ず。

右や左へと雑然混乱せる石塊の間を潜りつつ、大永山河股の間道を辿りけり。偕ても茲数日間の天候は、秋高馬肥の好節に違わず。遠辺の物色澄み冴へ、所謂長閑なる小春よりも幾

層鮮麗と言ふべし。世人三春の行楽を以て最上の快心と為す。独り予は秋候の快晴を歎び、陽春を第二者と思へり。たとえば何ぞ。春は陽也、秋は陰也。森羅万象其の期に接触せざるもの無けん。都で物盛んなれば衰ふるの^{ことわり}理にて自家の立脚地を常に陰に執り、即ち守成、有終美を期待せんこと人間の本領也。然れば吾人は斯く秋風落^{らく}莫^{ぼく}の時大に思慮を練り、筋骨を鍛へ、以て陽気の到る頃、大に活動する所無かるべからず。兎角意志の薄弱なる人は陽気一方に熱中し、陰気の間機微に乗ずるの素地を養ふことを知らざる者あり。若し夫れ克己心無く妄動するの徒は失意と為り。厭生と為り。懦弱^だと為り。遂に為す所なくして、絶海の孤舟たるに過ぎず。恐るべし誠^{いま}むべし精神修養の徒爾ならざることを遙かに見渡せば大永山巢^う領^{りやう}方面の展望は宛然一副の油絵也。海拔2500尺余の高地に

※巢領 → 須領

点々5・6の農家あり。鬱蒼たる森林、碁盤型の畑地、黄緑の作物、細縄を張りたる如き山路の彼等は、斯くの如き癖^か輒^{ひちよう}の地に浮雲を友とし、永き一代を逍遙するの悲しきを察せざるに非らず。併し彼等をして謂はしめりは、取り越し苦勞也。山奥の三軒家でも住めば都と唄ふにあらずや。乞ふ君等宜しく仙人境涯の趣味を研究すべしと。隱士茲^{ここ}に至って啞然たらざるを得ざる也。

四方の觀望に浮かれつつ呉木人家を後に見つつ、漸次下り坂と為れり。左面より天の一方を仰ぎ見れば二の森の絶巔^{ぜつてん}は東平附近第一の高峰たるには違わず峻嶮なり。幾千万貫の巨巖は今にも予が体を粉碎せんとするの状あり。古人尚恐巖^{げん}墻^{しょう}之下と云うことあり。如何にも是れに髣髴^{ほうふつ}せりとふべき也。去れど古人の箴言^{しんげん}の如く謹直^{しんちく}に遵^{したが}はんとせば、一寸先も歩行の出来ざるものの如し。試しに思へ石ヶ山より角石原に到る汽車。丸尾より東平に至る嶮岨の道路、其の他危険と言はば数限りも無し。吾人は常に危険の所に余を繋ぎパンの爲めに活動しつつあること故。何者か怖がるもの無しだと放言はするものの、実は内憂外平を装ふもの也。

※石ヶ山 → 石ヶ山丈

新井琴次郎の「別子鉾山案内記」にも石ヶ山丈と出ているので、ここは「丈」が欠落していると考えられる。

河股と東平との中間にラバロイ茸きの建物^{いぢへち}が森林の中より現はれり。是れ問はずして知るべし火葬所也。予は職務の關係上是非一瞥^{いちへつ}せざるを得ず。立ち寄れば土木課の中山君が工事を監督せられつつあるより、死体を焼く炉の装置^{など}方法杯の説明を聴けり。其の構造が完備して理想的に適ひ、而して建築が宏壮にして恰^{あたか}も都会のそれの如く。市を除き町村としての火葬所に恐らくは是に匹^{ひつちゆう}儔するもの無かるべし。予や此の火葬所の建築落成は、至大の感想無きを得ず。実は在来の火葬所は頽頽敗^{たいはい}に帰し、且つ設備の不完全なりし為め、焼くに

非常の時間を費やし加之燃料を多量に費やし、火夫の忌避一方ならず。管理者為めに大閉口を極めつつありしが、斯かる不便不自由も或る期間にて、今後は東平在住者幾千の為め大々の安心を以って快く死者を葬送することを得。是又感謝を表せざるを得ず。

河股に接近したる間道より西南を望めば、仲尾山は巍峩として雲際^{いんげん}に直立し、其の右側の大原より二条の溪谷あり。恰^{あたか}も人の両股を拈^ねけたるが如し。而して下流に随って合体す。清流^{とうとう}輕々の音を為して屈曲紆余して端出場以下の国領川に落つ。げに河股の名称は河其の者が形体より而かく異名されたるものなることを推知するに足れり。此の一帶の山水は逆も愚かなる筆を以って形容するの難さを知れり。柳宗元や蘇東坡の如き古大家をして一度此の地を踏み秀麗なる勝景に接しなければ、如何に雄大絶妙の文章が書けるならん。耶馬溪が頼山陽により日本一の優勝地と為り、赤壁の如き左迄珍とせざる処を東坡に依りて仰山の名所と為れり。夫れ人無ければ景あるべき^{ことわり}理なし。景なければ人無しと言ふを憚^{はば}らず。吾が於登志より丸尾附近の絶景と呉木より河股に到る形勝は未だ天下に隠れたる耶馬溪に非ざる歟。山陽、東坡の如き日陰の文豪あらざる耶。遠鳴会員^{えんめい}爰に謙遜して筆を執らざるぞ請ふ一番奮起して名文を発表せよ。

※於登志 遠登志を「ヲシ」とWA行表記すべきを「オトシ」とA行表記している。

河股に到着せしは午前10時過ぎなり。山林課大永山出張所は森林に^{いんぎょう}圍繞せられ、閑静なる裡に宏潔なる建築也。杉檜の苗栽培地あり。山羊飼育場あり。椎茸^{いず}人造場あり。孰れも山林課副産業として立派に経営せられつつありけり。事務所を訪問せしに久保久方君は高知県へ帰省せられ、三木良之助君在所せり。山林本課の平松清明君出張せられ居たるを以って、種々談話を交換し頗る興味深かりき。三木君より木炭製造の事に関し面白き話を聴けり。

たとえば此の河股より1里以上山奥に進めば製炭に従事する労働者200余名も居りて、一家を有するもの孰れも仮小屋を建てて棲めりと。是等の労働者は広島或いは讃岐、阿波等の各地より来りしものにて、甲所の製炭が済めば乙所に移動すると云うふ風にて、一家族を挙げて、狐狸に等しき山住まひを為し、其の稼業範圍頗る広大にして四国、九州と点々と飛び渡る。一種の太平野民と解釈するを得べきもの也と。予此の説を聴き^{たちま}忽ち探見の意起こりたれば、三木君に昼飯の世話を求め、番人お嫁の手に成りたる焼き椎茸、煽り肉、鮪の煮しめと言へる大牢^{せん}の羨然たる膳部に向かひ、飯3・4椀平らげ、山番某の道伴にて派出所を発足せり。

途中椎茸製造所を見る。杉林の間に1区画を設け、径6・7寸位の長さ、1間余の丸太材を無量排列せり。椎茸是に発生して如何にも気味良し。而して此の業何程迄も拡張するを得るとせば、有利なる副産物と言ふべし。^{こゝ}爰の処を去りて河股川を渡る。河嵯概して奇岩に富み清流激湍尽きる所を知らず。架橋在り如何にも文人的にして風流の趣味を帯べり。是より進めば一步は一步より高く^{きく}崎嶇たる鳥道多少人工を施しあり。難路と言ふに非らざるも亦予の如き万山馳驅^{ちく}の不馴れの者は左程易々たる感無し。山番某元中七番に多年山守の業務

を務めたる老巧者なりとて、談話頗る興味あり。20丁余も躋^{のぼ}りて下り坂と為る。川を超ゆる時7・8歳より10歳位の男女の子供、碯^{かわら}に遊戲す。是れ則ち炭焼夫の家族の一部なることを知れり。試しに年齢を問ひ夫より学校へ入学したることあるや否やを尋ねるに、然る事無しと。噫^{ああ}彼等無邪氣の良子弟は学齡兒童であり乍^{なが}ら通学の便なき為め、一代を明盲にて過ごさんとは氣の毒の至り也。河を超へて2軒の茅葺小家あり。中を窺^{うかが}ふに皆不在なり。夫より足洗ひの山道を登る。行く行く製炭窯の設けありて盛んに樹木を斫^{きり}倒し、之を負ふて窯場に運搬しつつあり。是等樵夫の生活状態を見るに極々簡粗にして石器時代の人物の如く想はる。而して彼等の中に一目を眇^{すがめ}するもの2・3人を瞳見す。聊^{いささ}か不審の感を懷きつつ前きの小家に到れば復た片眼の主人公に接す。愈々奇也とす。後に平松君や三木君に聴けば、一理無しとせず。彼等冬季に至れば粗造の茅小屋を密閉し、炉に木材を投じ4時間断無く煖^{だん}を執るより。煤煙は煙筒の設備なき為め室内に充溢し眼瞳を害する事甚だしいと。原因或いは是にあらん。伊勢の平氏忠盛卿のお友達沢山のことも也。

予は数件の小家を訪問し共同生活状態を聴き、且つ其の故郷並びに当山に來りたる経歴を尋ね、大に得る所ありけるが、只だ遺憾なるは子弟のに教育を施すことの絶体に不可能なるを知れり。彼が父たり母たる人の精神を問へば、学校に出されぬ恨み事也と自認する所あり。縦令衷心之を欲するも入学せしむる便なきを奈何せん。20世紀の今日、君ケ代の唱歌すら耳に入らざる人種ありとは、教化^{あまね}の洽^{あまね}く到らざるのあるか。將に制度の不備^よ敷否々パンの為めに是非無かりを認めざるを得ず。

別子東延合宿所特色

高橋生巳

我が東延合宿所は勇氣満々たる10の健児を以て形作られたる一大家庭にして、未だ呱呱^{こくこく}の声を上げて僅かに1ケ年と3ケ月なりと雖も、既に23名の入宿者あり。内13名の退宿者ありたるも、各自其の天職を全ふし和氣靄々たる家庭の主人公たるあり。或いは東都に神戸に福岡に在りて學業に励みつつあり。斯くの如く外部にありては宿友諸君の活動と共に、内にありては10名の同宿生能く宿規を守り社会の進歩と共に歩まんとし、其の知識を研磨しつつあるを以て特筆大書すべき事蹟甚だ多し。譬^{たと}へば學を修め業を習ひ以て智能を啓発し、徳器を成就せんが為め輪読会を友道を行ふを目的として俱樂部を、同宿者の親睦を図るを目的として娛樂会を設け、空前の大壮挙たる新居浜別子間往復徒歩競争あり。高蕨天幕旅行、赤石山野宿、開宿記念大運動会等あり。何れも別子5000の惰夫の胆を寒からしめたり、輪読会、娛樂会、遠足旅行、之れ皆天下に向かふて大に誇りとする我が宿風なり。斯くの如く我等の合宿は巖^{がんこ}乎たる本領を持し、正義の旗を高く海拔4000尺に掲げたるなり。船板は幾度換へられるも、船は原の船なり。我が合宿は己に一大人格を備へたり。入退宿ありて、恒に同一分子を収め難しと雖も現代に承け後代は現代に継ぎて千秋万古連綿と相伝へて易ること無からん。余りは我合宿の特色とすべき点を指摘し、詳細に之れを述べ、併せて我が合宿所の記録より壮快なる記事を写さん。

※合宿所の開設年月 遠鳴誌への掲載は明治42年9月5日発行の25号だから、産声を上げて1年3ヶ月で、開宿記念日が7月1日とあるので、明治41年7月となる。

※合宿所の所在地 海拔4000尺とあり、標高約1200mの所である。歓喜坑が1203mであるから、歓喜坑の標高のである。素麺の滝が標高1190m。素麺の滝の東上の3軒家の所が標高1200mであるので、そこだと考えたが、益友6巻56号の「銅山峰踏破の記」に、「第一通洞南口の上に東延合宿所がある。」と出ている。標高1100mである。海拔3600尺を丸めて4000尺としていた。

1. 輪読会

本会は本年1月24日を以って創設せられ、既に回数を重ねる事21人の多きに及び、同宿者相互に徳性を涵養し、智能を錬磨するの目的を達し、其の効着々として顕はる。10人の専門とする所、一ならば法律を深く研究したる者、採鉱学を専門とする者、或いは商業鉱業学び卒へたる者ありて、法律の講演を聴くの時法学生たり、採鉱学をの講義或る折は採鉱学生たり、商業及び工業学を学ぶの時商業鉱業学生となり、各自の知識を交換し、保険の何たるやを知らざる者も商業学学習者の講義に依り、大体に通じ法律の知識なき者も能く知るに至ると同時に、講義者は下調べを為すを以って深く専門を極め知識を錬磨するの利益、実に大なりと謂うべし。今や輪読会は毎月27日の日を以って開かれ、三上博士の刑法講義、鷲尾博士の法学通論に論語、水谷・石野両君の採鉱学講義、高橋の簿記学講義あり。各れも外部の聴講を許し、三上博士の刑法講義の時間には、別子守衛支部よりの聴講者多し。

2. 娯楽会

本会は輪読会と共に創設せられたるものにして、其の目的たるや同宿者相互に意志の疎通を図り親睦を厚うする為めにして、毎月17日を以って開催せらる。此の会の創設せられて以来同宿生の親密の度を層し、益々団結力を強するに至りたるは、何より喜ぶべきの現象なり。同じ家に住み、同じ釜の飯を食ひながら各室に陣取り、朝会えば御早う、晩に会えばや一ですまし、少しも打ち解けて面白い話をして終日の疲労を癒さず、自分は自分、他人は他人と云うふ合宿はあらざるか。此の娯楽会の目的たるや前述の如く意志の疎通を図るや、勿論なれども、同宿者一室に相集合し、打ち解け愉快に自己の経験談も^{はたま}将た失敗談話し、面白く可笑しくワハハとの中に初めて親睦を厚うして、其の目的は達せらるるものなり。我等同宿者は此の日を指折り数えて待つなり。此の日は2名を置き少額の費用を以って多くの御馳走を得んと欲するは人情の常にして、我輩と雖も免じる能はざるなり。大概、芋か豆か、^{はたま}将た善哉なるか、此の3つの中唯一つを選び、一同感謝しつつ健啖を競ふ。食ひ終われば、我が東延寮の寮歌勇ましく獅子の咆哮するが如く、天地も将に震動するの概あり。我等が寮歌を歌ふは、彼の英国民の国歌を吹奏して故国を追懐するが如く。我等も此の寮歌に依って我が合宿を懐ふ。愉快で愉快で又愉快なる我が合宿かな。

3. 倶楽部

倶楽部の開設は本年1月第1号室階下8畳を以って倶楽部と為し、食事及び会合の場所に充つる事とせり。室内は別に装飾を施さずと雖も、仰げば正面に戌申の詔書高く奉掲せられ、其れに隣り宿規を掲げ、四壁悉く忠臣孝子の朗詠聖賢古哲の垂訓嘉言及び東西の古英雄豪傑聖賢、我等の理想とすべき人物を以って賑ひ。朝夕之れに接し勉めて修養に怠りなく、草も木も無い別子の山に花も実もある合宿所じゃ。

4. 自修時間の制定

吾人人類の共同生活を為すには、法律の必要あるが如く。我等合宿所にも又規定あらざる可らず。茲に於いてか自修時間の制定を為し、午後7時より9時迄とし、其の間各自の室に於いて静粛に自修せる事とせり。学校の寄宿舎の如きは、一定の監督者ありながら自修時間を厳守せず、他人を防ぐるは層々経験する所なり。増してや社会の人、規律もなく監督者もあらざれば斯かる時間の制定などは、到底行はれざるやの感あれども、決して然らず。我等は能く確守し行けり。偉いじゃないかい我等の合宿所。

5. 入退宿会

本会は入退宿者の為め設けられたるものにして、入退宿者を倶楽部に招き、茶を舐り菓子^{ねぶ}を咬りて驢語^{かじ}し、入宿者に対しては我が合宿規を確守し、友誼^{かんご}を厚うせん事を誓ひ、退宿者に対しては我合が合宿に於いて修養せし本領を失するなく永久に交誼^{ゆうぎ}を持続し、我が合宿所の為め尽瘁^{じんすい}せん事を約し、愉快に迎へ名残惜しく送るを以って目的とする。此の会の利益とする所は友誼^{ゆうぎ}を深うし、時間を経済的ならしむ。

6. 遠足旅行

遠足旅行の健康に知識を広むる点に於いて非常なる効力を有する。我輩の多弁を要せざる所なり。宿規に日く身体の強壯を目的とする為め、時々遠足旅行を催すと、七寸の鞋千山万岳を踏破して、又残す所なしの概^{あらまし}あり。高嶽天幕旅行の如きは適例なり。

7. 記念祝祭

毎年7月1日を開宿記念日とし、一同厳肅なる式を挙げ、然る後余興として種々の催し物を為す。譬^{たと}へば本年8月開催せし運動会の如し。

以上は我が合宿所の特色として大に天下に誇るべきの点にして、我等の常に確守する所なり。(続く)

※明治期の文章は、漢語が基調となっているので漢字の読み方に手を焼く。特に接続詞の漢字については読み方に苦勞する。戦後の仮名の統一、登用漢字表の採用で文字の統制をする以前の自由さがうかがえるが、読みやすいように一部送り仮名は現代送り仮名にしている。

発行の際に印刷業者に任せて調整している。新井が会長で、上阪の際に、鈴木馬左也・総理事に雑誌の題名「遠鳴」揮毫を依頼して快諾を得ている。

遠鳴の説明は明治42年1月15日の18号

「昔話」は、明治42年10月5日発行の26号の掲載であった。

毎号専門的論説が掲載されている。

合田松太郎の「採鉱学大要」、
理学博士・河野密の「地質学講義」、
鋳槌の「地球発達の談話」

山中の様子がわかるもの

明治42年1月15日発行18号	遠鳴会とは
2月15日発行19号	九連坊の「別子鉱山案内記」、
3月25日発行20号	
4月 5日発行21号	
6月 5日発行22号	木葉の「高藪紀行小品」、骨々子の「初夏の東平」
7月 5日発行23号	「鈴木総理事と遠鳴」
8月 5日発行24号	
9月 5日発行25号	
10月 5日発行26号	今井の「昔話」
11月 5日発行27号	柳堤の「山遊びの記」、
	高橋生の「別子東延合宿所特色」
12月 5日発行28号	

P22の「遠鳴」の題字は、鈴木馬左也・総理事が新井会長の依頼で揮毫した「遠鳴」。

県立図書館の遠鳴

既読分

明治42年1月15日発行18号	遠鳴会とは
7月5日発行23号	「鈴木総理事と遠鳴」
8月5日発行24号	
11月5日発行27号	柳堤の「山遊びの記」、 高橋生の「別子東延合宿所特色」
12月5日発行28号	

未読分

明治43年2月5日発行30号	昔話（二の続き）
3月5日発行31号	別子たより、遠鳴余語、遠鳴問答
4月5日発行32号	遠鳴無駄話、東延合宿所の特色、御代島丸、 別子たより
8月5日発行36号	遠鳴無駄話、遠鳴余語、別子たより
9月5日発行37号	別子たより
12月10日発行40号	別子たより
明治44年5月15日発行44号	書窓独語、教育会議、南光院まで、広告分の今昔
8月15日発行47号	書窓独語、それから日記、遠鳴誌に就て、 活動写真、 新居郡設教育品展覧会に対する吾校の出品 父兄の学校参観、別子たより、東平たより
9月15日発行48号	明治初年前後の別子銅山採掘法 別子生吹製錬法に就て、薤哲学、 別子校に於ける精神的方面 面目を新たにしたる東平小学校 四阪たより、別子たより
10月15日発行49号	これから日記、貯金の要、教育会議、 青年の悪風潮に就て 別子校に於ける精神的方面 こんな事、波麗会、天狗会記事、別子たより 東平たより
12月15日発行51号	此意気、台所記、大阪屋敷まで、一寸記す 天狗会記事